

島本町文化財調査報告書

第 26 集

広瀬遺跡発掘調査概要報告

平成 26 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は、原因者による宅地開発に伴って、平成24年度に実施した発掘調査の成果を報告するものです。

当調査地は、町内の埋蔵文化財包蔵地である「広瀬遺跡」にあたり、遺跡のはば中心を西国街道（旧山陽道）が走り、古くから交通の要衝として発展してきました。また、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮跡を含み、町内では重要な遺跡の一つとして注目されてきたところでもあります。近年の広瀬遺跡の発掘調査におきましては、水無瀬離宮の関連施設であると考えられる建物跡や中世段階の山陽道の路面が検出されています。

今回の発掘調査では、平安時代前期の貴族の邸宅跡であると考えられる建物跡を検出し、後鳥羽上皇の水無瀬離宮造営の前時代の島本を考える上で、非常に重要な資料になるものと考えられます。

最後になりましたが、調査にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力いただきました土地所有者の方や近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお札を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年 3月

島本町教育委員会
教育長 岡本克己

例　　言

1. 本書は、平成24年度原図者負担金事業として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した、広瀬遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員木村友紀を担当者とし、平成24年11月19日に着手し、1月20日に終了した。島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、平成26年3月31日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
【調査員】 木村 友紀 坂根 瞬
【調査補助員】 原 由美子 布施 英子
4. 本書の執筆は木村、第3章第4節 出土遺物は、小森 俊寛氏に寄稿いただいた。作成・編集は木村、坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6. 現地作業及び整理作業においては、関係機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

小森 俊寛、大洞 真白、林 亨、木村 泰彦、井戸 龍太、中川 依里、田中 千津子、三浦 弘勝、守屋 美弘

凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面水 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土地理院第IV系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 造構記号については、以下の通りである。
S D : 溝　　S B : 掘立柱建物　　P : ピット　　S K : 土坑
4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目 次

序文	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
付表	
図版目次	
第1章 はじめに	
第1節 島本町の地理的概要	1
第2節 島本町の歴史的環境	1
第2章 遺跡の概要	
第3章 広瀬遺跡発掘調査	
第1節 調査経緯	5
第2節 層位	6
第3節 検出遺構	9
第4節 出土遺物	18
第5節まとめ	26

挿図目次

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/10,000)	
第2図 調査地位置図 (1/5,000)	3
第3図 調査区区割り模式図	5
第4図 調査区壁面断面図・遺構断面図 (1/50)	7
第5図 調査区平面図 (1/250)	8
第6図 S B01平面図・断面図 (1/100)	9
第7図 S B02平面図・断面図 (1/100)	10
第8図 S B03・04平面図・断面図 (1/100)	11
第9図 S B05・06平面図・断面図 (1/100)	11
第10図 S B07平面図・断面図 (1/100)	11
第11図 S D02 II・III期掘削平面図 (1/200)	13
第12図 S D02 I期掘削平面図 (1/200)	13
第13図 A地区ピット断面図 (1/40)	14
第14図 A地区東拡張ピット断面図 (1/40)	15
第15図 B地区ピット断面図 (1/40)	15
第16図 B地区北拡張ピット断面図 (1/40)	16
第17図 B地区南拡張ピット断面図 (1/40)	16
第18図 C地区ピット断面図 (1/40)	17
第19図 遺物実測図 1 (1/4)	21
第20図 遺物実測図 2 (1/4)	22
第21図 遺物実測図 3 (1/4)	26

付 表

付表1 本報告書掲載遺跡	4
付表2 出土遺物観察表1	29
付表3 出土遺物観察表2	30

図版目次

- 図版一 北東試掘坑北壁・南試掘坑西壁・調査区全景（北西から）
　　北東試掘坑北壁
　　南試掘坑西壁
　　調査区全景（北西から）
- 図版二 A地区全景（南から）・B地区全景（西から）・C地区全景（東から）
　　A地区全景（南から）
　　B地区全景（西から）
　　C地区全景（東から）
- 図版三 S B01（北から）・S B05・06（西から）・S B03・04（南西から）・S B07（南西から）
　　S B01（北から）
　　S B05・06（西から）
　　S B03・04（南西から）
　　S B07（南西から）
- 図版四 S D02 III期掘削全景（北から）・S D02 III期遺物出土状況・S D02 I期掘削全景（南から）
　　S D02 III期掘削全景（北から）
　　S D02 III期遺物出土状況
　　S D02 I期掘削全景（南から）
- 図版五 出土遺物一
- 図版六 出土遺物二
- 図版七 出土遺物三
- 図版八 出土遺物四



1. 山崎古墓 2. 【府指】有文 開大明神社木殿 3. 鈴谷瓦窯跡 4. 【重文】水無瀬神宮客殿・茶室 5. 水無瀬唯宮跡
 6. 桜井城跡 (6) 【史】桜井城跡 (櫻木正成伝承地) 7. 伝待宵小侍從墓 8. 越谷遺跡 9. 源吾山古墳群 10. 水無瀬在跡
 11. 御所池瓦窯跡 12. 桜井遺跡 13. 桜井御所跡 14. 広瀬遺跡 15. 広瀬南遺跡 16. 【府指】天 尺代のヤマモモ
 17. 【府指】天 大沢のスギ 18. 山崎西遺跡 19. 神内古墳群 20. 山崎東遺跡 21. 【府指】天 若山神社「ツブラジイ林」
 22. 御所ノ平遺跡 23. 青葉遺跡 24. 広瀬溝田遺跡 25. 鈴谷遺跡 1001. 西国街道

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/10,000)

第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要

島本町は、大阪府の北東端、京都府との境に位置する面積16.78km²の町である。北は京都市西京区と長岡京市、北東は大山崎町、東南は八幡市、南は枚方市、西は高槻市に隣接する。

町の面積全体の約7割を山岳丘陵地が占め、人口約3万人の自然豊かな町で、町域の東南部で、木津川、宇治川、桂川の三川が合流して南西に流れる淀川を作り出す地形は、北側の天王山山塊と南側の生駒山地の北端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。

自然環境の面でも「大沢のスギ」や「尺代のヤマモモ」、「若山神社のツブラジイ林」が大阪府指定の天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。また水無瀬神宮の「離宮の水」は後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮にちなんで名づけられたと言われており、昭和60年7月に大阪府内で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

第2節 島本町の歴史的環境

島本町では、国指定史跡桜井駅跡をはじめとして、多くの遺跡や文化財が周知されている。

島本町における人々の生活の始まりは旧石器時代にさかのぼる。山崎西遺跡は未調査のため様相は不明であるが、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器とチャート製の剥片数点が採取されていることから、旧石器時代の終わり頃から人々が生活し始めたと考えられる。

広瀬遺跡では縄文時代晩期の住居跡が検出されている（未報告）。また、町の西側に位置する越谷遺跡では、縄文時代後期に相当する北白川上層式1期から2期の鉢、甕が多く出土し、弥生時代の土器も出土していることから、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと、人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。

その地より東側西国街道に近い青葉遺跡や史跡桜井駅跡周辺においても近年、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土しており、広い範囲で古代から生活が営まれたと考えられる。

桜井地区の源吾山古墳群と高槻市にまたがる神内遺跡からは、名神高速道路建設時に古墳時代の土器や鉄器が採集され、付近に古墳や古墳時代の集落があったことを示している。

奈良時代に入ると、奈良の東大寺に瓦を供給したのではないかとされる鈴谷瓦窯が造られた。この地の南に位置する御所ノ平遺跡では鈴谷瓦窯跡で出土したものと同種の瓦が出土し、窯付の住居跡が検出されたことから、瓦工人の住居ではないかと考えられた。西国街道を中心に広がる広瀬遺跡でも集落跡の存在が確認されており、広範囲にわたって、生活の場が存在したと考えられる。また、水無瀬川の西岸部には、東大寺正倉院に残る日本最古の絵図「摂津水無瀬絵図」に描かれる奈良東大寺領の荘園「水無瀬荘」が造営された。

その後、平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町は水・陸の交通上重

要な位置を占めるようになった。『延喜式』にある山崎駅の記述や『土佐日記』、『更級日記』などには、山崎津の賑わう様子が記載されている。平安時代初頭には桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れ、この地は狩獵場として利用されていたようである。

『伊勢物語』には、文徳天皇の第一皇子である惟喬親王の御殿が水無瀬にあったと記載されており、広瀬遺跡で検出された平安時代前期の建物跡群は、惟喬親王の水無瀬離宮と関係が深いものであると考えられる。

『明月記』には、鎌倉時代のはじめに、後鳥羽上皇が水無瀬に離宮を造営し、その離宮に何度も行幸した様子が記されている。広瀬遺跡からは、その後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連すると考えられる建物跡が検出されており、西浦門前遺跡からは、明月記に記された水無瀬離宮の情景と一致するような庭園跡が検出されている。

中世以降には、「太平記」の記述で有名な史跡桜井駅跡がある。この史跡は延元元年（1336）に、足利尊氏の大軍を迎撃つため京都を発った楠木正成がここで長子の正行に遺訓を残して河内へと引き返らせた「楠公子別れの地」として広く世に知られ、現在もこの地を訪れる観光客は後を絶たない。また、時代はさかのほるが、桜井駅跡は奈良時代の初め、京から西国に向かう道筋に設置された駅（うまや）の一つに「大原駅」が『続日本紀』に記され、これが桜井駅跡の地を指すものとも考えられている。

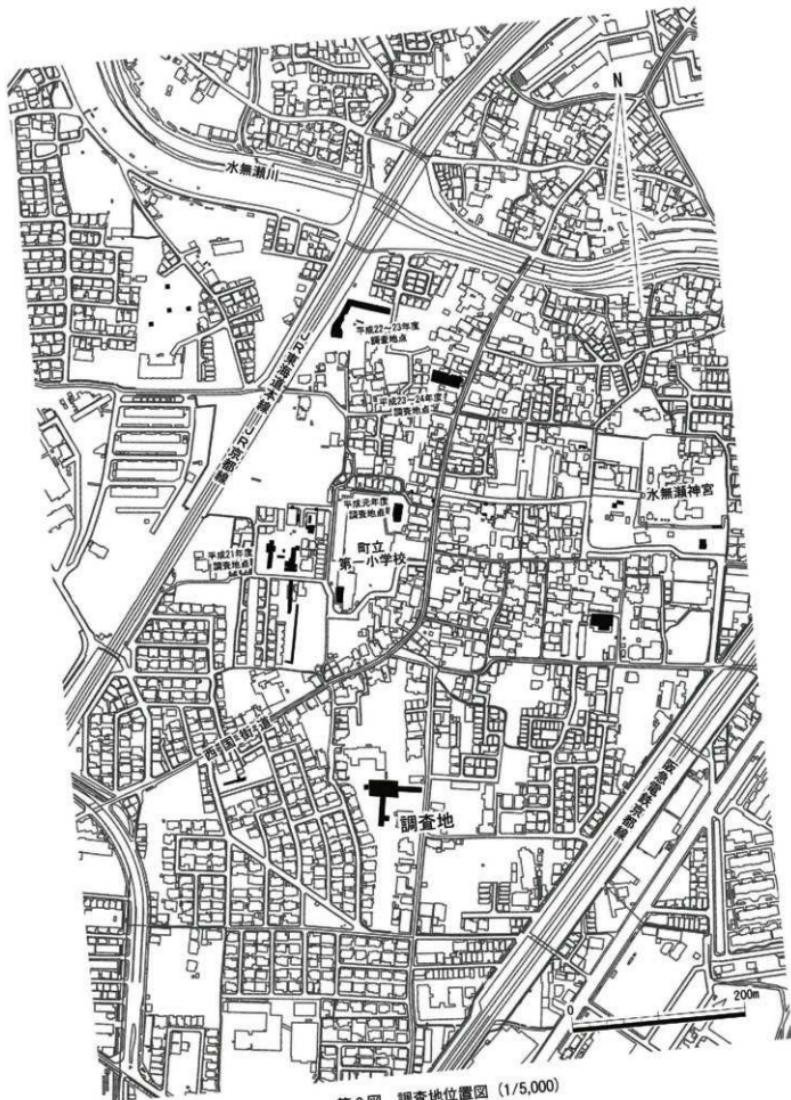
第2章 遺跡の概要

本書で報告を行う発掘調査の所在地は、「水無瀬離宮跡」を内包する「広瀬遺跡」にあたり、近年開発の進む町内では、比較的広い耕作地が残されている地域である。

広瀬遺跡は、広瀬地区全域にわたる大規模な遺跡である。町内の東端部を北西から南東の方に向に流れる水無瀬川の右岸に位置し、遺跡のほぼ中心を西国街道が走る。遺跡の時代は、奈良時代～近世として登録されているが、近年では縄文時代の遺構が発見されるなど、新たな発見の多い遺跡である。

広瀬遺跡の代表的な発掘調査例としては、まず平成元年に実施した町立第一小学校のプール移転工事に伴う調査⁽¹⁾が挙げられる。この調査では、奈良時代末～平安時代初頭頃の掘立柱建物跡を検出しており、その年代と縦柱建物跡であることから、水無瀬荘に關係する倉庫跡ではないかと考えられている。

次に、平成17年度に実施した宅地造成工事に伴う調査⁽²⁾では、多くの鋤溝跡と大溝跡を検出しており、大溝跡は集落の単位を示すものではないかと考えられた。大溝跡の埋土からは、鎌倉時代後期（13世紀半ば～末）の瓦器碗が出土していることから、この頃に大溝が埋まったものと考えられる。この調査地は本書で報告する調査地と非常に近く、本調査地より約75m北



第2図 調査地位置図 (1/5,000)

の場所に位置する。

平成21年度に、町立第一小学校の約50m西の場所で実施した宅地造成工事に伴う調査⁽³⁾では、礎石建物跡を検出した。この礎石建物跡周辺からは、鎌倉時代初頭の青磁や白磁といった陶磁器類や瓦、建物に使用された飾り金具と考えられる金属製品が出土しており、格の高い建物が存在していたことが窺える。また、出土瓦が官営工房である栗柄野瓦窯産であることから、この礎石建物跡は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮の関連施設の可能性が高い。

平成22～23年度にかけて実施した宅地造成に伴う調査⁽⁴⁾では、斜面に投棄された大量の土師器が出土した。これらの土師器の年代は、13世紀後半～14世紀前半と、後鳥羽上皇の崩御後であるが、前述の平成21年度の調査で出土した瓦と同様のものが出土している。このことから、水無瀬離宮に關係する施設が、後鳥羽上皇が隠岐に配流した後も存続しており、この地で何らかの儀式が行われたのではないかと考えられる。

平成23～24年度にかけて実施した西国街道に面する場所での店舗建設工事に伴う調査⁽⁵⁾では、旧山陽道の路面を検出した。現在の西国街道の西端より、約6m西の地点で旧山陽道の西端を検出し、3.5m以上の幅を有していることが明らかになった。調査地の敷地東端で検出したため、調査区を広げることができず、東端を発見することができなかった。正確な道路幅は知ることができないが、現在の西国街道の下に続くものと思われる。

平成24年度に実施した宅地造成に伴う調査⁽⁶⁾では、縄文時代晩期の竪穴住居跡と石器工房跡を検出した。この発見により、広瀬遺跡は縄文時代から続く集落跡であり、非常に古い時代から人々の生活が営まれてきた土地であることが明らかになった。

以上のように、広瀬遺跡は縄文時代から現代までと非常に長い間、生活の場として利用されてきた土地であり、検出してきた遺構の性格も多種多様である。これらの遺構は、広瀬遺跡内でも、中央から北側に位置し、今回の調査地は南側に位置する。広瀬遺跡の南側は、調査例が少なく、北側で検出した遺構がどの範囲まで広がっているか明らかになっていない。本調査地もその範囲に含まれる可能性があったため、試掘調査を実施した。その結果、遺物包含層を確認したため、本調査を実施することとした。

地区名	調査地	調査期間
広瀬遺跡	広瀬五丁目616-1、617、618	平成24年11月19日～平成25年1月20日

付表1 本報告書掲載遺跡

註

(1) 島本町教育委員会 1991 『島本町文化財調査報告書』第1集

- (2) 島本町教育委員会 2005 「-1 平成17年度広瀬地区遺跡範囲確認調査」『島本町文化財調査報告書』第10集
- (3) 島本町教育委員会 2012 『島本町文化財調査報告書』第19集
- (4) 島本町教育委員会 2012 『島本町文化財調査報告書』第18集
- (5) 島本町教育委員会 2013 『島本町文化財調査報告書』第23集
- (6) 未報告

第3章 広瀬遺跡発掘調査

調査期間：平成24年11月19日（月）から平成25年1月20日（日）

調査地：大阪府三島郡島本町広瀬五丁目616-1、617、618

調査面積：約1006.3m²

第1節 調査経緯

本事業は、宅地造成工事に伴うものであり、記録保存を目的として実施した発掘調査である。宅地部分は盛土されるため遺跡は保護されるが、宅地の間を走る道路部分の下層は、長期間にわたり人の手から離れると考えられるため、道路部分を対象として発掘調査を実施した。

道路部分は、東西約61mで、東端から約42mの位置から南に約41m延びるT字型であり、幅は全て6mである。

発掘調査を行うにあたり、東西道路の西端、南北道路と東西道路の交差点付近、南北道路の南端付近の三箇所にそれぞれ東西約6m、南北約6mの試掘坑を設定し、層序の確認と遺構・遺物の確認を行った。その結果、現地表面から約20cmの深さで遺物包含層が確認できたため、その深さで面的に掘削を行うこととした。

発掘調査を行う場所は、道路部分を基本としたが、東西道路の西端から約33.5m地点まで北に6m、南に約7.2m拡張して調査を行った。

その結果、平安時代前期のものと考えられる300基以上のピットと7棟の掘立柱建物跡を検出した。島本町では、平安時代の遺構がまとまって発見されたことは初めてだったので、平成25年1月12日に現地説明会を開催し、229名の



第3図 調査区区割り模式図

方々に来場していただいた。

その後、平成25年1月20日に調査区の埋め戻しが完了し、調査を終了した。

調査の際は、T字路の交点の南側をA地区、西側をB地区、東側をC地区、B地区を北側に拡張した場所をB地区北拡張、南側に拡張した場所をB地区南拡張、A地区を東側に拡張した場所をA地区東拡張と呼称した。本書でも、それらの呼称を用いることとする。

第2節 層位（第4図）

調査地の現況は畑であったが、それ以前は水田が営まれていたことが知られている。これらの時期の褐色粘質土（第2層）の耕作土が20～30cmの厚さで堆積し、その下層には耕作土の床土と考えられる黄褐色粘質土（第3層）が3～10cmの厚さで堆積する。

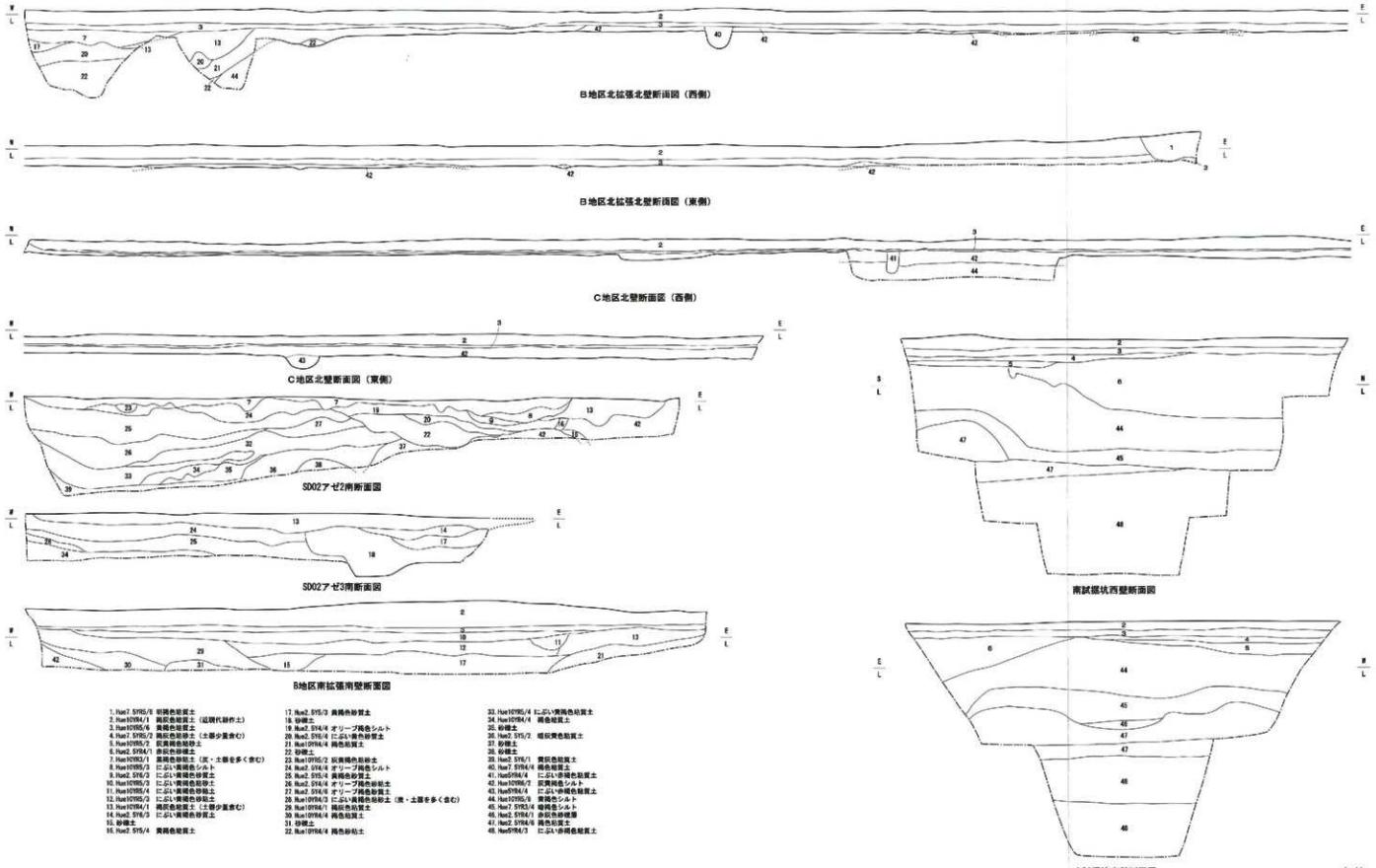
それらの下層は、調査地北側では、上から順に、5～25cmの厚さの灰黃褐色シルト（第42層）、20cm以上の厚さの黄褐色シルト（第44層）が堆積していることを確認した。

調査地南側では、上から順に、30～95cmの厚さの黄褐色シルト（第44層）、15～45cmの厚さの暗褐色シルト（第45層）、35～70cmの厚さの褐色粘質土（第47層）が堆積し、その下層はにぶい赤褐色粘質土（第48層）が130cm以上の厚さで続くことを確認した。調査地南側は、河川等の影響を強く受けたようであり、第3層と第44層の間の7～12cmの厚さの褐色粘砂土（第4層）、5～15cmの厚さの灰黃褐色粘砂土（第5層）、65～85cmの厚さの赤灰色砂礫土（第6層）や、第45層と第47層の間の5～10cmの厚さの赤灰色砂礫土（第46層）といった流路状の堆積が確認できる。

第42層は、今回の調査で検出した遺構面の基盤層であり、上面で多数の遺構を確認した。遺構の埋土内に含まれる遺物の年代から、それらの遺構の年代は平安時代前期に属するものであると考えられる。

西国街道の西側に比べて、東側は深いところに遺構面が存在し、既往の広瀬遺跡の調査では、現地表面から1m以上の深さで中世の遺構面を検出してきた。今回の調査地も西国街道の東側に位置するが、現地表面から約30cmと非常に浅い位置で、平安時代の遺構面を検出した。調査地南側は流路状の堆積が多く見られ、河川等の影響を受けてはいるが、遺構の多くが北側に集中しており、基盤層である第42層也非常にしっかりとをしている。

また調査地西側には、幅9mを超える大きな溝S D02が存在していることから、周辺と比べて高く、地盤がしっかりとしており、水場が近くに存在している場所を選定して、施設の造営が行われていたことが窺える。



第4図 調査区壁面断面図・造構断面図 (1/50)



第3節 検出遺構（第5図）

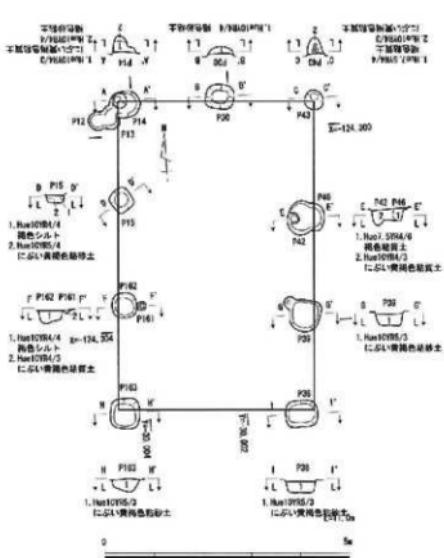
A 地区から C 地区の各調査において、柱あたりが残り、掘立柱建物の柱穴と出来るものを主体とする多数の切り合うビットを検出し、掘り下げ調査を行った。B 地区北拡張から B 地区南拡張にかけて切り合う S B01、02 の 2 棟、B 地区の北拡張部において切り合う S B03、04 とした 2 棟、A 地区東拡張区において、これもほぼ重なって切り合う S B05、06、C 地区では横列等の可能性も残る柱列 S B07 等の建物跡等を確認している。以下では個別図を掲載した各建物について記す。

【獨立柱建物跡 S B01】(第6図)

S B01はB地区とB地区南拡張にまたがる掘立柱建物跡であり、P 14・15・30・38・39・43・46・162・163によって構成され、柱穴掘形の平面形状は、隅丸方形を呈する。南辺の柱穴P 38とP 163以南では、柱穴を確認できず、また、両柱穴間でも柱穴は検出されなかった。梁間2間×桁行3間の南北棟身倉舎と見ており、梁間・桁行とも検出部の柱間はほぼ21mを測る7尺等間の建物である。桁行の軸方向は、真北から約5度東に振る。

【掘立柱建物跡SB02】(第7図)

S B 02は、B地区とB地区北拡張にまたがる掘立柱建物跡であり、P 1・2・7・17・21・



第6図 SB01平面図・断面図 (1/100)

34・35・51・55・124・127・128・131・132・133・208・214・216・218によって構成される。南北4間×東西4間の総柱建物と見ている。柱列の南北幅は、約8.4mを測り、柱間はほぼ1間2.1mで、7尺等間である。しかし、東西方向は西辺とその隣りの2間はほぼ2.4m（8尺）、その東側が約2.9mのほぼ10尺、東辺の柱間は約2.1mで、合わせると約9.7mである。東西方向の柱間は不規則であるが、総柱の建物と理解しておく。

建物の南北軸線は、真北から2度東に振っている。SB01と軸線方向は同じである。これらの二つの建物跡は一部が重複しており、併存していた建物ではないだろう。柱穴同士での切り合

いがなく、掘り方からの出土遺物も多くないので、建物の前後を確定することはかなり無理もあるが、SB01が先行するものと見ている。

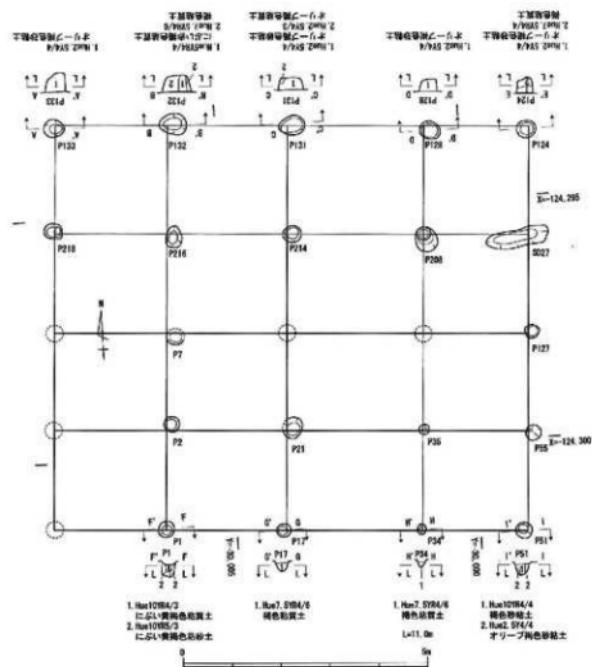
【掘立柱建物跡 SB03・04】(第8図)

SB03・SB04はB地区北拡張で検出した掘立柱建物跡であり、SB03はP115・117・121、SB04はP107・113・118によって構成される。

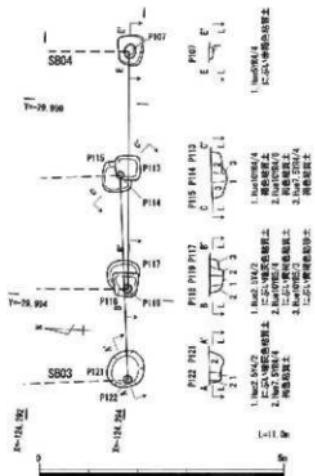
SB03の柱間はそれぞれ約2.1mで、柱穴掘形の平面形状は円形である。SB04の柱間はそれぞれ約2.4mで、掘形の平面形状は隅丸方形である。P113がP115を、P118がP117を切り込んでおり、SB03が先行して建てられていたことがわかる。

SB03の柱列の軸は、真西から約3度南に振っており、SB04の柱列の軸は真西から約1度南に振っている。

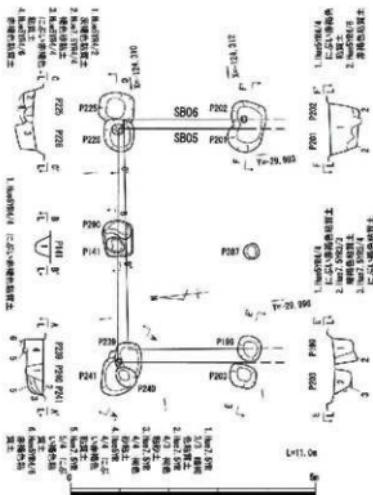
SB03・04共に東西2間分しか検出していないが、両者共に、南北建物の身舎の南辺部を見



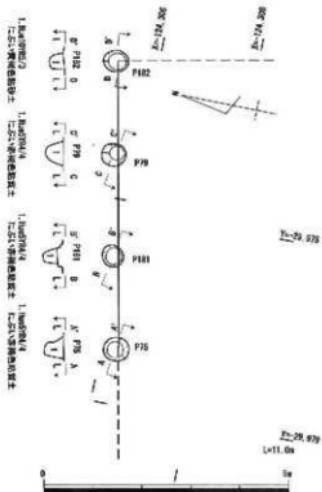
第7図 SB02平面図・断面図 (1/100)



第8図 S B03・04平面図・断面図 (1/100)



第9図 S B05・06平面図・断面図 (1/100)



第10図 S B07平面図・断面図 (1/100)

ており、主要部は北壁以北に展開するものと見ている。

【掘立柱建物跡 S B05・06】(第9図)

S B05・S B06はA地区東拡張で検出した掘立柱建物跡であり、S B05はP141・201・203・226・239・287によって、S B06はP199・202・225・241・290によって構成される。柱穴掘形の平面形は、ほぼ隅丸方形を呈するものが主体のようだ。

S B05・06の柱間は東西南北共に2.4m程を測り、8尺等間である。共に南北方向の建物の身舎部北辺と見られる。S B05の建物の軸方向は真北から約6度東に振り、S B06の軸方向は真北から約5度東に振る。なお、柱穴P287は東柱と見ている。切り合い関係は

両建物柱穴のP 226がP 225を、P 239がP 241を切り込んでおり、建物S B06が同規模のS B05に建てかえられたと理解して良いだろう。

【掘立柱建物跡S B07】(第10図)

S B07は、C地区で検出した建物跡であり、P 75・79・181・182によって構成される。

4基を東西1列で検出しており、柱間は約1.9mを測り、6尺強の等間の建物である。4間Hが西へ延びる可能性があるが、東端のP 182以東でも90度曲がった1.9m程の南でも柱穴を検出している。もう1間程度西へ延びる可能性はあるが、いずれにしろ短い距離しか持たない柵列あるいは塀跡等の可能性も検討が必要である。

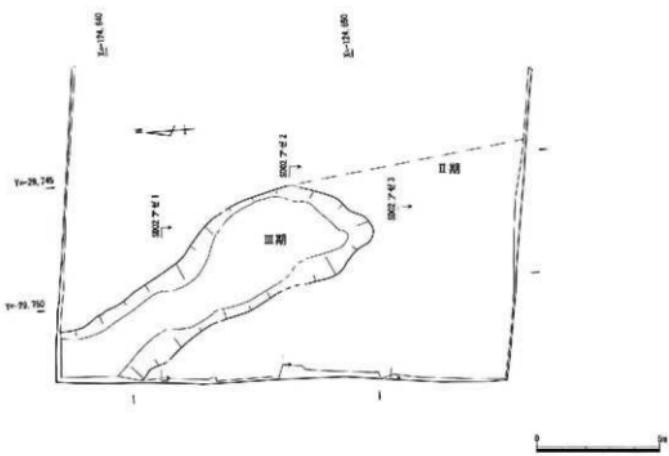
上記のように、今回の調査では、多くのピットを検出し、7棟の掘立柱建物跡の存在を確認した。ピットは北西を中心に分布し、南東に向かうほど希薄になる。南東側は流路堆積が確認でき、流路の影響を受けづらい北西側が生活の場として選定されたと考えられる。また、S B03・04は調査地北壁外に続き、調査地西端に位置するS D02内に含まれる遺物もB地区からB地区北拡張を中心出土することから、これらの建物群の中心地は調査地北側から北隣接地に位置していたと考えられる。

これらの掘立柱建物跡の柱穴の掘形形状は、隅丸方形のものと円形のものの2種類があり、S B01・04・05・06は隅丸方形、S B02・03・07は円形を呈する。掘形が切り合っているものや建物配置が重なっているものも存在し、これらの建物群が数度の建て直しを行っていることがわかる。特にS B03とS B04は重なり合っているものの、S B03を構成する柱穴の掘形形状が円形を呈しているのに対して、S B04を構成する柱穴の掘形形状は隅丸方形を呈している。S B03の柱穴をS B04が切り込んでいることから、S B03が建てられ、その後S B04が建て直されたことが明らかである。これと同様に掘形形状が円形を呈するS B02・03・07が先行する建物群であり、S B01・04・05・06が後から建て直された建物群であると考えられるかもしれないが、柱穴・掘形の埋土から出土した遺物が少なく、個々の建物跡の時期差を明らかにすることはできなかった。また、S B05・06も重なり合った建物跡であるが、両方とも柱穴の掘形形状は円形を呈しており、円形を呈する掘形を有する建物跡同士でも時期差があることを示している。それぞれの建物跡の軸方向が一定でないのも、その造営された時期差によるものであろうか。

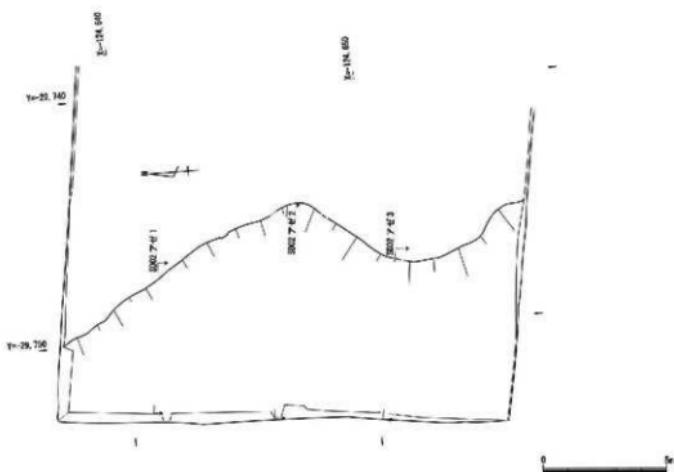
【溝状遺構S D02】(第11・12図)

S D02はB地区・B地区北拡張・B地区南拡張に連続する、自然流路と考えられる。流路内の堆積状況は、大きくI期・II期・III期の三時期に区分できる。

S D02内の基本層序は、上から、炭や遺物を多く含む黒褐色砂粘土(第7層)が全体に広がり、西側ではオリーブ褐色シルト(第24層)、黄褐色砂質土(第25層)、オリーブ褐色砂粘土(第



第11図 SD02 II・III期掘削平面図 (1/200)



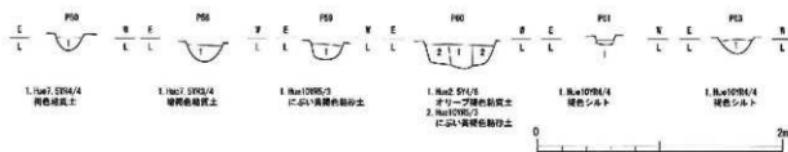
第12図 SD02 I期掘削平面図 (1/200)

26層)、オリーブ褐色砂質土(第27層)、褐色砂粘土(第32層)、にぶい黄褐色粘質土(第33層)、褐色粘質土(第34層)、暗灰黄色粘質土(第36層)、黄灰色粘質土(第39層)という順に堆積している。西側に向かって土層は下がっていき、B地区では調査区西壁から約0.5mのところでそれぞれの上層の堆積が最も厚くなり、そこから西側に向かって上がっていくことから、その付近が溝状遺構の最も深い場所であったと考えられるが、地表面から約1.8m掘削を行っても溝状遺構の底を検出することはできなかった。

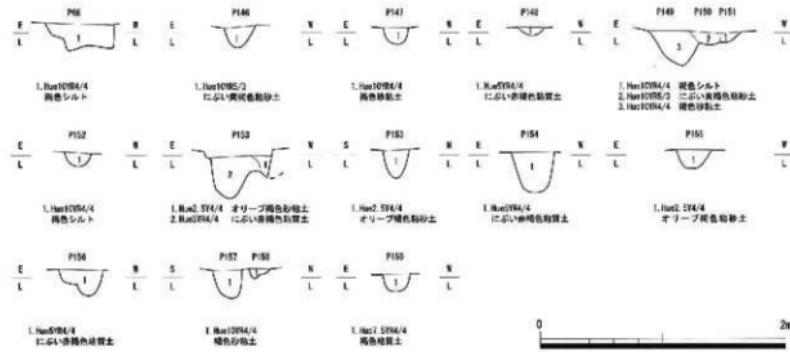
東側の第7層の下層は、上から、にぶい黄褐色シルト(第8層)、にぶい黄褐色砂質土(第9層)、少量の土器を含む褐灰色粘質土(第13層)、オリーブ褐色シルト(第19層)、にぶい黄褐色砂質土(第20層)、砂礫土(第22層)という順に堆積している。

西側の第24~27・32~34・36層とその間に入り込んだ砂礫土層の第35・37・38層は、調査区西壁付近に向かって下がっていることから、一連の堆積であると考えられる。しかしながら、東側の第8・9・13・19・20・22層は、西壁から約6mの場所に向かって下がっており、その付近に一時期の溝状遺構の底があったものと思われる。西側の堆積(第24~27・32~34・36層)を東側の側の堆積(第8・9・13・19・20・22層)が切りこんでおり、西側の堆積が成された後に、東側に新たな溝状遺構が形成されたことがわかる。そして、その東側の溝も、ほぼ埋まった段階で、第7層が堆積する。SD02西側の第24~27・32~34・36層が堆積した時期をⅠ期、SD02が一旦埋没し、SD02東側に新たに溝が形成され、その溝内に第8・9・13・19・20・22層が堆積した時期をⅡ期、SD02がほとんど埋まり、浅い溝になった後に、第7層が堆積した時期をⅢ期とする。

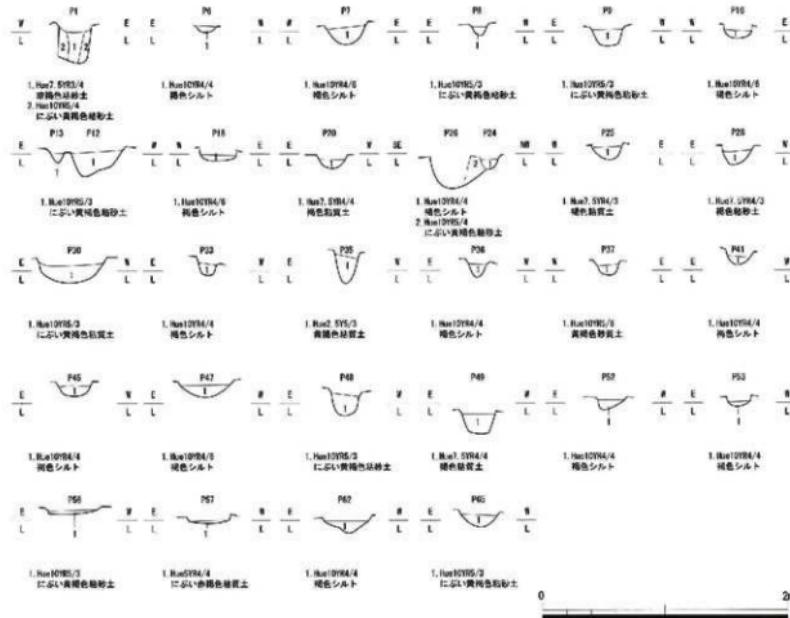
Ⅲ期に堆積した第7層には多くの炭と遺物を含み、それらが溝状遺構東岸側に偏在していることから、SB01~07といったSD02の東側に位置する建物群から廃棄された炭や遺物とみていい。ただし、SB02の一部は、SD02の堆積土に切り込んで形成されており、SD02が埋まった後に、SB02が建てられたことが分かる。第7層から出土した遺物は、土師器・須恵器・黒色土器の他に、綠釉陶器や灰釉陶器といった当時の高級食器類なども含まれており、Ⅲ期の掘立柱建物跡の主が富裕層であったことを物語っている。



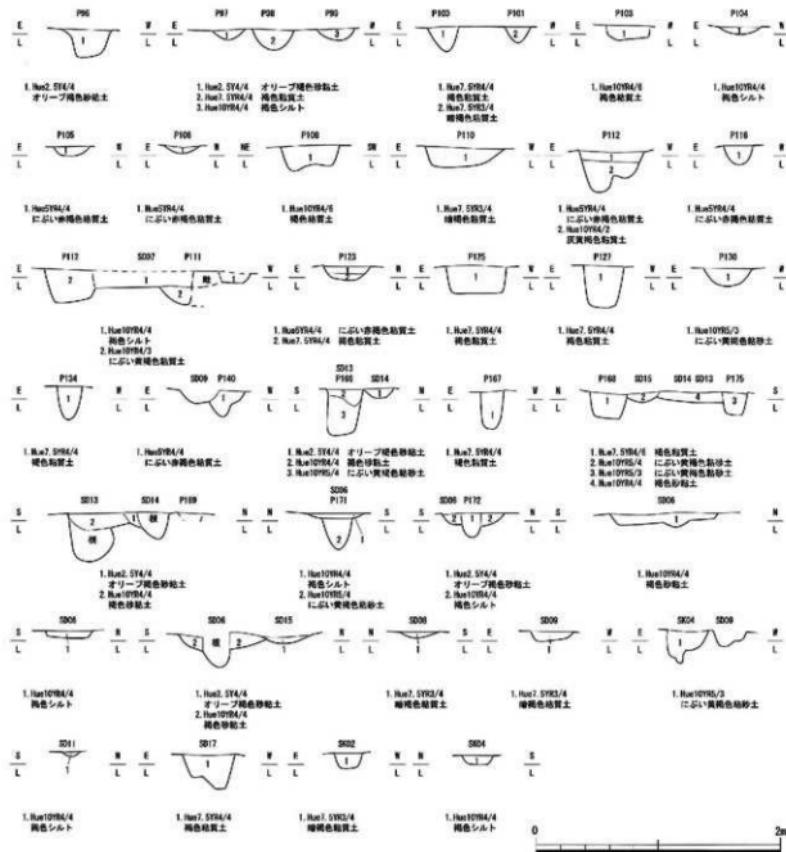
第13図 A地区ピット断面図 (1/40)



第14図 A地区東拡張ピット断面図 (1/40)



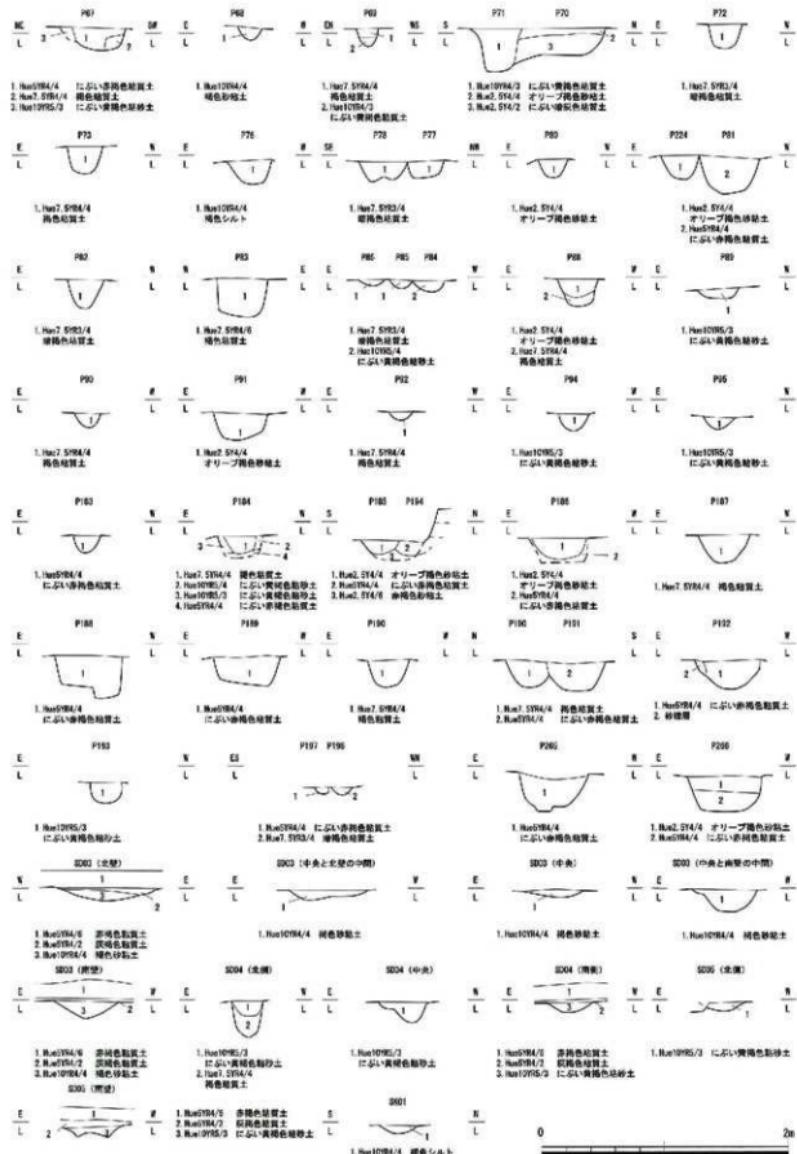
第15図 B地区ピット断面図 (1/40)



第16図 B地区北拡張ビット断面図 (1/40)



第17図 B地区南拡張ピット断面図 (1/40)



第18図 C地区ピット断面図 (1/40)

このS D02は、検出した肩部がおよそ北から南に走る溝状遺構であるが、南方向にあるA地区では溝状遺構は検出できなかった。A地区は、他の地区と比べて、砂礫土層が多くみられ、S D02の影響とも考えられる。また、北約75mの場所には、平成17年度の調査地があり、その調査では大溝が検出されている。その大溝は成立年代が、鎌倉時代後期（13世紀半ば～末）と推定されている。S D02の年代と異なっているものの、位置や方向が重なっている点などから、同じ性格を持った遺構の可能性が高いと考えている。

【ピット P66】

A地区東拡張で検出したピットである。埋土内からは、7世紀～8世紀初頭の土師器の高坏等が出土している。

【ピット P149】

A地区東拡張で検出したピットである。埋土内からは、9世紀以前の須恵器の壺の体部や9世紀の土師器の壺の口縁部等が出土しており、このピットの年代は9世紀と考えられる。

【ピット P266】

C地区で検出したピットである。埋土内からは、8世紀後半～9世紀前半の土師器の壺や壺等が出土しており、このピットの年代は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

【溝跡 S D05】

C地区で検出した溝跡である。埋土内からは、8世紀後半～9世紀前半の須恵器の壺、9世紀の土師器の壺、9世紀後半の土師器の壺碗、9世紀後半以降の黒色土器A類の壺もしくは碗等が出土しており、この溝跡の年代は9世紀後半以降と考えられる。

【溝跡 S D11】

B地区北拡張で検出した溝跡である。8世紀後半～9世紀前半の土師器の壺等が出土しており、この溝跡の年代は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

第4節 出土遺物

今回の調査では、時期による出土量の多少や弥生時代等の空白期間はみられるが、縄文時代晩期を始めとし、古墳時代及び古代以降の各時期に渡る土器・陶磁器を中心とした各種の遺物が出土している。なお、遺物は古い時期からの混入遺物を含めて、調査地をやや蛇行的ではあるが南北に貫く溝跡 S D02から出土したものがその大半を占めている。

S D02出土の縄文土器やP129出土の古墳時代の土器片は、より新しい時代に位置付けられる層や遺構への混入遺物として少量出土したに留まる。一定量の出土が認められるようになるのは、飛鳥・奈良時代～平安時代初期頃の7世紀後葉頃以降～9世紀前半頃の土師器・須恵器を主とする遺物であり、主にS D02 I期から出土している（第19図）。

遺物は9世紀前半頃に一旦減少傾向を示すが、質・量ともに最も増加するのは9世紀後葉頃を中心とする平安時代前期後半で比定できる土器・陶器類であり、主にS D02Ⅱ期から出土している（第20図）。碗A・類A・皿A等を中心とする土師器食器類・煮炊具・高台の付く壺、碗、皿を主とする黒色土器A類（内黒）の食器類と、少数の煮炊具である黒色土器A類の壺、少数の須恵器食器類・同壺・壺等の貯蔵具、碗・皿等の食器を中心とした山城産が主体をなす多量の縄釉陶器、それより少量ではあるが尾張猿投窯を主とする灰釉陶器の食器類が出土している。縄釉陶器は量の多さに加え、出土例が限定的な唾壺等の稀少品が含まれる点が注目される。

S D02Ⅱ期を中心に出土するこれらの土器・陶器類の様相は、平安京域内の一町あるいはそれを上回る敷地規模とされている邸宅跡の遺跡からの出土遺物の様相と組成構造に通じるものである。調査規模が小さいこともあり、平安京域内の高級邸宅と絶対量は比べようもないが、前後する9世紀後半で多数の縄釉陶器、灰釉陶器等の高級品を含む大量の遺物が出土した「斎宮」の邸宅跡とされている平安京右京三条二坊十六町の一町規模の邸宅跡や⁽¹⁾「西三条第（百花亭）」跡とされている平安京右京三条一坊六・七町跡の同じ一町規模の邸宅跡⁽²⁾の園池内からの出土資料等に、基本的な組成構造とその様相は通じているといえる。

平安時代前中期～中期初め頃の10世紀前半頃には、遺物出土量が大きく減少傾向を示す。S D02Ⅲ期からは、9世紀後半頃かそれ以前に比定できる混入遺物の出土も多いが、平安時代前半期の10世紀頃に比定できる土師器・須恵器片が、少量ずつながら出土している。この遺物出土量の激減は、平安時代中期初め頃に当遺跡の土地利用が大きく変わったことを示すものである。平安時代中期中頃後以降に比定できる遺物はごく少数で、若干増加するのは平安時代末期～鎌倉時代頃であるが、当地で宅地的利用が再開されたことを示す程ではない。室町時代以降から近代の遺物もごく限られたもので、平安時代中期後半以降には耕作地化が進み、近代に至ると考えられる。

第19図（図版五・六）

9世紀前半以前に位置付けている遺物である。1はS D02Ⅰ期から出土した縄文土器（深）鉢である。体部から口縁部は外方へ開き口縁端部は短く外反する。類品が京都市大原野の上里遺跡⁽³⁾から出土しており、小さな平底状の底部が付くと推定される。内・外器表をヘラミガキで仕上げているが、弥生土器壺に通じる煮炊具で、縄文晩期～弥生時代初期に位置付けられる。2はP129より出土した土師器壺で、全体に薄作りで口縁部は「くの字」状に折れ外方へ直線的に開き、端部の内上端が小さく丸く肥厚する。体部は丸味を持ってふくらむ球胴状を呈し、口縁部内外面はナデ仕上げしている。体部外面はやや摩滅しており、内面には板ナデに近いケズリ痕跡が残る。形体的特徴からは古墳時代前期のいわゆる「布留式土器」である。1・

2とも混入品としての出土だが、近接地に同時代の遺跡の存在を示す資料と考えられる。

3～8は土師器食器類である。3は浅い坏C、4はやや深い坏A、5・8はローカル色の強い坏である。6・7は外面の体部下端部から底部をヘラケズリし、体部から口縁部の内外はナデ仕上げする。口縁部の形態が平城京出土の皿A Iに類似するが、細部の特徴から在地産の皿とみておく。3、4、6、7には粗い斜放射暗文を施す。

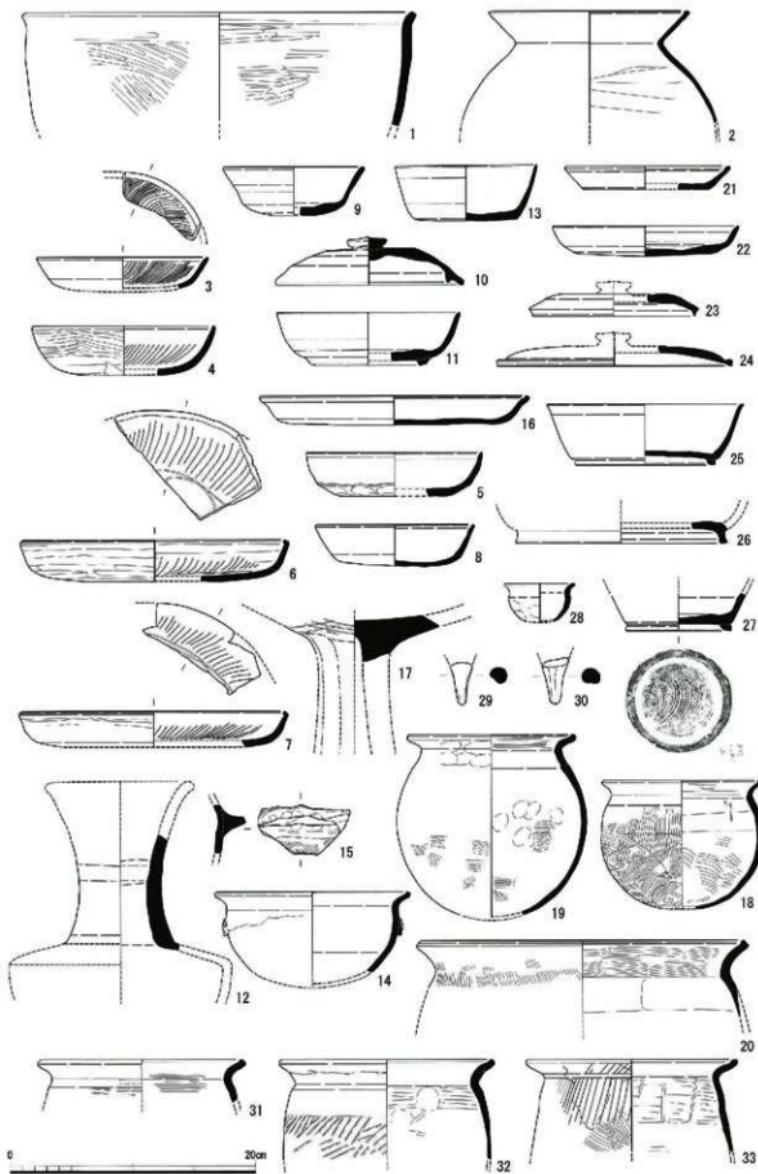
14・15は体部外面の中位上に把手が付く土師器甕で、14は小振りで体部外面に粘土紐の継ぎ目を残し、ハケ目調整等を加えず製作途中で仕上げており、祭祀用の可能性もある。15は短胴丸底の畿内で一般的な煮炊具である。これらの土師器食器類と甕類は、8世紀中葉頃～後半にかけての幅の中には位置付けられるだろう。

9～11・13は須恵器食器類、12は同壺である。9は体部～口縁部の傾きが強い小振りの坏A、10は扁平な宝珠つまみを付すかえりの付く坏B蓋、11は体部下半部に丸味を残す低い高台の付く坏B（身）、12は頸部から口縁部が小さなラッパ状に開くと見られる長頸瓶の頸部片である。体部は肩が角状に稜を持つ形式と推測している。これらの須恵器は7世紀末葉頃～8世紀前半頃の幅の中には収まと見ている。13はやや深い小振りの坏Aであり、8世紀中葉～後半の中には位置付けられる。これらの須恵器は陶邑あるいは同系統とみてよく、吹出を含む北摂地域内の製品であろう。

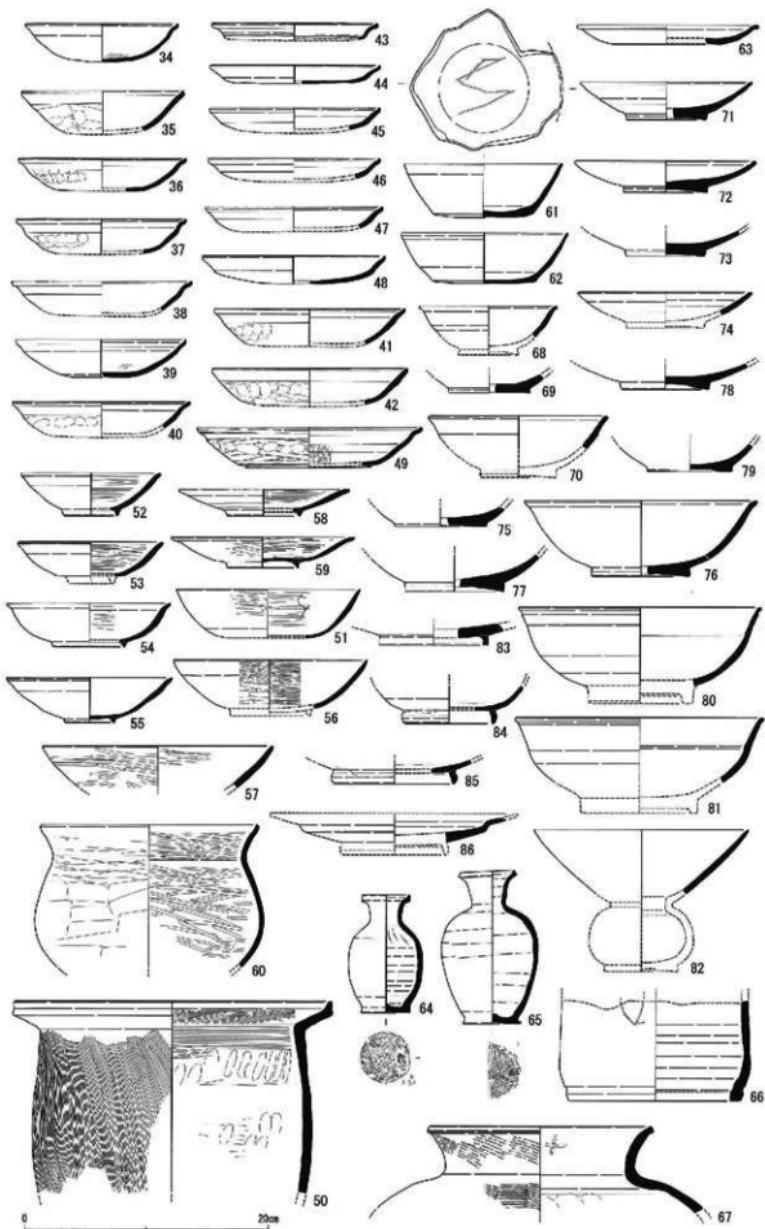
16は土師器皿A Iであり、底部外面に粗いヘラケズリを施し、内面から口縁部外面までヨコナデで仕上げている。摂津在地産と見ているが、体部から口縁部にかけての開きが強くなっている。都城でC手法が盛行している段階に併存する資料と考えてよいだろう。17は坏部下部から脚上端部が残った土師器高坏である。脚部はヘラケズリによる7面あるいは8面あると見られる面取りによる仕上げが確認できる。坏部下端にはヘラミガキ痕が認められる。胎土及び残存部の形態等からは、京都I期中⁽⁴⁾頃、8世紀末～9世紀初め頃の都城形の大振りな高坏である。

18～20の土師器甕は球胸状の体底部を持ち、口縁端部上端はナデにより小さく丸く肥厚する。体部外面はすべてハケ目調整で仕上げ、19・20は口縁内面にはナデ下に成形時のヨコハケを残すが、体部上端～口縁部内外はすべてナデで仕上げており、基本的にはタタキ成形後に内外面にハケ目調整とナデ調整を加えた大和産の都城形甕によく近似したものが主体である。しかし大和からの搬入品ではなく、在地産あるいは枚方の楠葉産と見ている。8世紀後半～9世紀初頭頃の内に位置付けておく。

21～25は須恵器食器類、27は同壺である。21・22は皿A、23・24は坏B蓋で、23は扁平となるが笠形を残し古相を呈するが、24は天井の周縁部が強く屈曲する形状で新相を呈する。25の坏Bは体部の開きが進んでおり、高台は体部の立ち上がりにかなり近く付く奈良時代後半以降



第19図 遺物実測図1 (1/4)



第20図 遺物実測図 2 (1/4)

の新相を呈する。27の壺は、小振りで高台が付き、高台内の底外面に糸切り痕を残す。これらの須恵器も先のものと同様、陶邑あるいは陶邑系の窯跡の製品とみている。8世紀後葉から9世紀前半頃の時間幅の内には比定できる。

28はミニチュアの鍋で同サイズの小さなカマド等とセットで出土する例が多い。29・30は土馬の脚端部で、形状と丁寧なナデ仕上げ等から都城形ともいえる定形化した土馬と推測される。長岡京や平安京の洛内あるいは郊外の祭祀遺構からの出土例は多い。

31～33は土師器壺である。この3例は粘土紐成形の後にタタキを加えて胴部～底部を成形しハケ目とナデにより仕上げている。短胴の胴部に口縁上端部を小さく丸く肥厚させて収めている。上述の18～20の土師器壺に共通する基本的な形式的要素を持つものである。しかし31・32は体部外面に仕上げのハケ目調整が省略されている等の、製作工程を簡素化する方向の型式変化が読み取れる。33は体部外面のハケ目調整の粗いものとなっており、体部上部には、粘土紐成形の際に加える1次継ハケ目痕が確認できる部分も見られる等、進度は異なるが工程を簡略化する方向の型式変化は読み取れる。このような型式変化の進展を踏まえると、これら3例は18～20と比して、1～2型式以上新しい型式に属し、平安時代前期の内でも後半となる9世紀後半頃に位置付けていいだろう。このような見方からは、第20図側に組み込むべきものと考えているが、紙面の都合上、第19図の最下部に収めた。31・32は18～20と同様、淀川対岸の枚方楠葉産と見ており、33は肩部～胴部を丸めに強く張り出させず、端部の丸い肥厚もやや扁平で、口縁部の開きが強い等の全形や、胎土の褐色味が強い色調等型式的特徴が、31・32とは異なっており、攝津の在地産の可能性が高いと考えている。

第20図（岡版六・七・八）

9世紀後葉に位置付けられる遺物を主体とした図版であり、主にSD02II期以上から出土している。34～49は土師器食器類、50は同壺である。34～37は碗Aで、34・35はやや小振りで深さを残し古相を呈する。34は底部内面にハケ目を残す。35は外面に古相を示す粗いヘラケズリ痕が残る。36・37は体部の開きが大きくなり、器高がやや低くなる等、新相への型式変化が進んでおり、34・35に比べて壺Aに近い全形を呈する。38～42は口径14.5cm代と15.5cm代～16.0cmと法量的には2階級見られる。全形的には体部が大きく開く浅い器形が主体となっている。42の体部外面にはごく粗いヘラケズリ痕が認められ、古相を残す。

44～48は皿Aであり、小型化しているが48は皿A I、他の43～47は皿A IIに位置付けられる。皿Aは内面にハケ目痕を残すものもあるが、オサエとナデによるいわゆるe手法による製品である。49の壺Bは、高台が断面三角形状の低く小さなものとなっている。内面の体部下半～底部にはハケ目痕を残す体部外面に残るヘラケズリも隙間のある粗いものである。

これらの土師器食器類は、各種の型式的特徴からは枚方の楠葉産と見られ、枚方の禁野本町

遺跡や平安京跡からの出土資料と比較の上での時間位置の推定が可能な資料といえる。これらには碗Aとした34・35に形態的・技法的に古相を示し、時間的位置も9世紀中葉頃まで遡る可能性のある個体も見られる。しかし全体的には、碗A・坏A・坏B・皿A I・IIは古相を示すものも一型式の変異幅のうちには収まる型式的まとまりをもっており、平安京のII期中段階の幅のうちには収まるものである。

50の土師器甕は、中胴の体部に直線的に大きく開く口縁部が付き、口縁端部は上端が突起して発達し、端部外面にやや幅のある面を持っている。体部内外面にはやや斜めの縱方向のハケ目調整、内面は押圧痕の上をナデ調整している。口縁部内面にはハケ目を残すが、内外面ともにヨコ方向のナデによって仕上げている。型式的特徴や製作技法痕跡から、攝津產とみてよいだろう。9世紀後半で位置付けておく。

51～60は畿内の黒色土器A類（内黒）で、52～57が食器類、60は煮炊具の甕である。51は無高台の坏であるが、器壁も薄手化し、体部から口縁部の開きが大きくなり底部は縮小した印象となっている。9世紀後半で位置付けてよいだろう。

52～55は体部から口縁部が大きく開いて新相の碗器形を呈する。56・57も小さく低い高台が付くと推測される。52～57の高台の付く碗類も、京城内では平安京II期中頃の9世紀後葉頃以降に増加が認められるようになる器形である。58・59は小さく低い高台の付く皿である。体部が立ち上がり部から直線的に低く大きく開くタイプで、金属器に通じる姿器系の形態を持つ。これは平安京においては9世紀第2四半期頃から現れる器形（綠釉陶器や灰釉陶器にも見られる）であるが、出現期のものよりは、高台は小さく低くなり、体部から口縁部もラインが甘く、定形化してからの生産がかなりの期間続いた後の製品とみられ、9世紀後半で位置付けておく。これらの碗、皿の黒色化する内面はほぼ全てヘラミガキが施されており、坏51の内面には暗文の残欠が認められる。坏51や碗の大型品56・57等にも外面にヘラミガキ痕が残る。60は小振りの煮炊具の甕、内面はナデの上にヘラミガキが施されている。外面は口縁部から体部上半にヘラミガキを施すが、中位付近以下はヘラケズリが残る。底部は土師器甕同様の丸底であろう。黒色土器A類は、甕も含めて9世紀第4四半期を中心に位置付けておく。

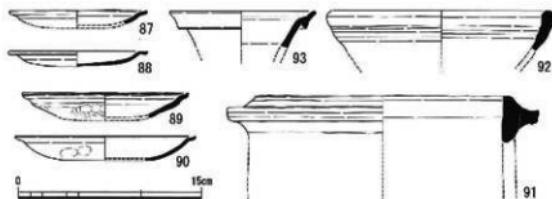
61～67は須恵器である。奈良時代以来の伝統的な器形である坏Bや同蓋等は見られなくなり壷・甕等の貯蔵具は須恵器が中心的である。61・62は平底の坏Aで、9世紀前半期頃までのものに比べると器壁も薄くなり体部から口縁部が大きく開き新相への変化が明瞭となっている。なお61の底部内面には逆Z字状のヘラ描きが認められる。63の皿は浅く扁平で口縁部が強く外反しており、全形は綠釉陶器等いわゆる瓷器系に通じる形態を呈している。平安京跡では、9世紀中葉以降に見られる新相の器形である。9世紀後半の内には位置付けられる。64・65は壺Mとされている小さな壷である。高台が付かず、糸切り痕を残す平底で仕上げられている。66

も平底であり、体部外面中位下にV字的な劍先形の粗いヘラ彫りが認められる。67は体部から底部がやや長く底部が窄まり氣味の丸底であり、洛中でも普遍的に出土が見られる。体部外面は粗い平行タタキ痕が残る。内面は青海波の受け具痕をナデ消している。口縁部外面はヨコ方向のナデ調整を加えている。陶邑系の製品に類品が多く認められる。平安時代前期頃には平安京跡でも出土例が多く報告されている。なお口縁部内面に十字状のいわゆる窯印が彫刻されている。これらの須恵器は坏A61・62、皿63とも9世紀後半では古い段階とも見られ、64~67の壺・壺類も9世紀中頃以前への位置付けも可能である。これらの須恵器は食器類を含め、SD02Ⅱ期で主体をなす土師器に比べると少し古い段階から使用され、土師器食器類と同時期の9世紀第4四半期頃に同時に廃棄された可能性が高い。

68~81は綠釉陶器の碗・皿である。69・71~73は削り出しの平高台を有する碗・皿であり、4点とも底部外面にはヘラケズリ調整を加えており、糸切痕跡を残さない。68・70・74も同様の底部と推定される。75~77は底外中央を小さくケズリ凹めた、削り出しの蛇ノ目高台の碗である。78は幅広の削り出し高台の皿であり、79も同様の削り出しの幅広輪高台が付く碗である。80・81は体部中位に不明瞭な稜が付く稜碗である。外面の稜に比べ対応する体部内面中位に付く段状痕跡が比較的明瞭である等、山城産稜碗の特徴をよく備えている。比較的径の大きな削り出しの輪高台が付くものと推測される。82は綠釉陶器の唾壺の口縁部と見ている。口縁に向かって直線的に開く形状が碗と似るが、碗等とするには湾曲が少なく平たい部分が幅広く、このようにラッパ状に大きく開く口縁部は、唾壺の唾を受ける鉢状口縁部と見てよいだろう。

これら綠釉陶器の唾壺を含むほとんどの破片で釉下にはヘラミガキが認められる。平高台、蛇ノ目高台、輪高台とバリエーションはあるが、すべて削り出して成形されており、高台の残るすべての碗・皿は山城産といえる。また、高台の欠失した破片も、軟質なものからやや硬質なものまで全て高台の残るものと共にしており、山城産と判断している。2個体以上出土している稜碗は、体部外面の稜が明瞭な尾張猿投産とは異なる特徴を持つ稜碗であり、胎土も加えて他のものと同様山城産と判断できる。唾壺は山城産の資料に類品は少ないが、やや硬質で褐灰色の粗めに見える胎土や緑灰色の釉調から、山城産としてよいだろう。これらの綠釉陶器は、平高台や蛇ノ目高台の一部のものが、平安京Ⅱ期古段階まで遡る可能性はあるが、他の輪高台のものや、稜碗等は9世紀後葉の同Ⅱ期中段階に位置付けてよいだろう。

83~86は灰釉陶器であり、83は角高台を持ち黒笛14号窯型式に属する皿、84・85はいわゆる三ヶ月高台を有する黒笛90号窯型式に属する碗である。86は高台を欠失するが折線的口縁部の幅が狭くなっている段皿で、三ヶ月高台を有するタイプであろう。これらの灰釉陶器は全て東海地方の尾張猿投産である。83の皿は角高台がやや高くなり変形している点等から、黒笛14号窯式の内では新相側に位置し、9世紀中葉の平安京Ⅱ期古段階に、86は同Ⅱ期古の新相からⅡ



第21図 遺物実測図3 (1/4)

期中の9世紀後半に、84・85はⅡ期中の9世紀後葉頃を中心に位置付けておく。

S D02Ⅱ期から主に出土した土器・陶器は、硬質なものを主体とする須恵器、縁釉陶器、灰釉陶器等には9世紀中葉頃まで遡る古相のものがよく残っているが、9世紀後葉に位置付けられるものが確実に含まれている。また、軟質の土師器、黒色土器等では、9世紀後葉の内でも新しい段階に位置付け可能なものが中心的である。このような見方からは、硬質の古相の陶器類や須恵器は、やや古い時期に入手されたものが伝世使用されており、9世紀後葉に位置付けられる新相のものが中心の土師器や黒色土器と一時期並存して使用されて、9世紀後葉のうちのほぼ同時期に廃棄されたものと考えられる。

第21図

S D02Ⅰ期から主に出土した遺物である。87～90は土師器食器類であり、87・88は皿、89・90は壺で、基本的にはオサエとナデによるe手法である。4点とも器壁が薄手化しており、口縁部がナデにより外方へ屈曲している。その上端が小さく丸く肥厚する等、型式的特徴が共通しており、枚方の楠葉産と見られ、平安京Ⅲ期の10世紀後半から11世紀始め頃に位置付けられる。91は土師器羽釜である。II縁端部の直下に端面を持つ厚く短い錫が付く。粗めで砂粒の目立つ胎土からも浜津産の羽釜といえる。92の須恵器鉢は長めの太い玉縁形の口縁形状を呈し、京都II丹波の篠窯産と見られる。10世紀後半から11世紀初め頃に位置付けられる。93は須恵器壺で、口縁端部の上・下端が発達し幅の少しある縁帯状を呈する。焼きの甘い白灰色の胎土や口縁部の特徴等からこれも篠窯産とみてよいだろう。生産年代は10世紀前半～中葉頃の幅で見ておきたい。

これらS D02Ⅲ期出土の土師器、須恵器類は、平安時代中期の10世紀後半から11世紀初め頃に位置付けられる遺物が主である。これらの遺物はS D02が11世紀の初め頃には廃絶していたことを示している。

註

- (1) 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 『平安京右京三条二坊十五・十六町－「審宮」の邸宅跡－』 京都
市埋蔵文化財研究所調査報告 第21冊
- (2) 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』 京都市埋蔵文化財研究所
発掘調査概報2002-5
- (3) 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2008 『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』 京都市埋蔵文化財
研究所発掘調査報告2007-12
- (4) 小森 俊寛 2006 『京から出土する土器の編年的研究』 京都編集工房

第5節 まとめ

今回の発掘調査によって検出し、堀下げ調査までおこなった掘立柱建物7棟は、建物軸線は、ほぼ近似したものであるが、大きくは先行するSB01、03、05とそれぞれに後出するSB02、04、06の2群に大別できる。3棟の建て替えが同時期的か、若干なりとも前後するのかに関しては、断定的理解は難しく、調査区北側隣地の調査成果も加えてから結論したい。また、先行するグループから後出グループの建て替えに関しては、一間が7尺あるいは8尺の建物から一間8尺、あるいは9尺の建物のへとそれが大型化する方向性を共有しているようだ。土地利用を掘立柱建物群から見ると、先行する建物が建つ時期と後出する建物に建て変わっていく2時期の画期が認められるようである。SB07は何らかの形で画期と並存し、さらに10世紀代まで残る可能性も考えられる。

出土遺物の内では、主体を成す溝状遺構SD02からの出土品には、Ⅰ期－飛鳥～奈良時代の7世紀後半～8世紀頃の一群、Ⅱ期－長岡京期～平安初期頃の8世紀末～9世紀前半頃の一群、Ⅲ期－平安時代前期後半の9世紀中頃から後半の一群、Ⅳ期－平安時代中期前半から中期中頃の10世紀頃から11世紀初頭頃の4群に大別できる。出土の質・量面では、Ⅲ期のものが他を圧倒しており、差は大きいが、Ⅱ期が続き、Ⅰ期とⅣ期は出土量も少なく、Ⅳ期より以降はさらに減少することが明らかになった。

Ⅲ期の平安時代前期の後半頃の遺物は多数の上部器壊・皿に加えて、椀・皿等の食器類に加えて、睡壺を含む多数の古代縁釉陶器や少数ながら古代灰釉陶器の食器類を中心としている。Ⅲ期の出土遺物群の質量とその様相は、平安京城内の1町あるいは、2町以上の天皇家宮殿あるいは藤原家の高級邸宅跡等の遺構から出土する平安時代前期後半頃の遺物の様相によく通じるものである。このような様相の遺物が出土する遺跡に建物群を建てた人物は、京城内の高級邸宅あるいは宮殿を使用していた、天皇家を中心とした上層階級に属する人物とみて大過ないだろう。

掘立柱建物群に関しては、柱穴内からの出土遺物が少なく、時期確定も難しいが、建て始めと建て替えの2つの二期の内、建物が少し大型化する建て替えの二期は出土遺物の盛衰という状況証拠からは、最も盛行する9世紀中頃から後半代の内とみて良いだろう。また、先行する建て始めは長岡から平安初期のⅡ期の内との見方も考えられるが建物の存続期間等も考慮すると、Ⅲ期内の早い段階頃とみるのが妥当と考えており、Ⅲ期の早い段階に建てられた建物がⅢ期の内にやや大型化した建物群に建て替えられたと考えている。

平安時代前期の本町の歴史は文献史料が乏しく、発掘調査による遺構・遺物の発見もほとんどなかったため、その実態はまだまだ明らかにされていない。歌物語である『伊勢物語』の第82段「諸の院」と第83段「小野」に、現在の島本町内にある「水無瀬」という地名が登場する。「諸の院」の記述に依れば、惟喬親王が毎年桜の花盛りになると水無瀬の離宮に赴き、右馬頭（在原業平）や紀有常らと酒を酌み交わしながら和歌を詠んでいたと述べられている。惟喬親王は文徳天皇の第一皇子であったが、母は紀氏の出身であり、藤原氏出自の母をもつ惟仁親王との皇位繼承争いに敗れ出家し、京都山科の小野に隠棲したとされている人物である。水無瀬の離宮の具体的な年代は「諸の院」や「小野」には記されていないが、在原業平が老人として描かれており、業平の生没年が天長2年（825）から元慶4年（880）であるので、9世紀第三四半期後半から第四四半期初頭頃のことであろうか。そう考えると、今回の発掘調査で検出した掘立柱建物群の最盛期が9世紀中頃～後半であり、惟喬親王が水無瀬の離宮を訪れていた時期と一致する。検出遺構や考古遺物から、今回検出した建物跡群が惟喬親王の水無瀬の離宮であると断定することはできないが、同時期の水無瀬の地に、平安京の貴族の邸宅と同様の様相と組成構造を有する上器類を使用した建物群が全くの無関係であるとは考え難い。これらの建物群を営んだ人物は、現在の資料状況からでは断定的理解を示すことは難しいが、惟喬親王その人であった可能性は高いと考えている。

埠図	図版 番号	遺構	種類	形	法量			出土	性状	色調
					口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)			
1	B地区北竪築黄色シルト層	繩文土器(深)鉢	32.0	(6.8)	密	良好	10YR7/3に似る黄橙			
2	B地区 北竪築P129	土師器 壺	16.4	(9.2)	やや粗	良好	10YR6/2 反黄褐			
3	B地区北竪築 SD02北側 灰色土層	土師器 壺C	14.0	(2.6)	密	良好	5YR6/4に似る黄			
4	B地区北竪築 SD02北側砂利層	土師器 壺A	15.0	4.0	密	良好	7.5YR7/4に似る橙			
5	B地区南竪築 SD02北側砂利層	土師器 壺	14.2	3.6	密	良好	SYR6/8 椿型? 10YR8/4 浅黄桂			
6	五 B地区 SD02アゼ(タヌキ)	土師器 壺A	22.0	3.4	密	良	SYR6/8 椿			
7	B地区 反色層断面	土師器 壺A	22.0	2.95	密	良	SYR6/6 椿			
8	五 B地区 SD02南 黒色土内	土師器 壺	13	3.45	密	良	7.5YR7/4に似る橙			
9	B地区 SD02アゼ(タヌキ)	須恵器 壺A	11.6	4.0	密	良	SYR1/1 反白			
10	B地区北竪築 SD02北側 反色層・下層	須恵器 壺B蓋	15.45	3.9	密	良	N7/0 反白			
11	五 B地区北竪築 SD02南側 反色層	須恵器 壺B	16.0	4.35	9.6	密	良好	SYT7/1 反白		
12	B地区 南竪築カクラン	須恵器 豆		(9.45)	密	良	N7/0 反白			
13	五 B地区北竪築 SD02南側 灰色下層	須恵器 壺A	11.6	4.6	8.3	密	良好	SYT7/1 反白		
14	五 B地区南竪築 SD02砂利層	土師器 壺	16.0	(6.6)	密	良	7.5YR6/6 椿			
15	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 壺	(7.6)	(4.1)	密	良	7.5YR7/6 椿			
16	B地区北竪築 SD02北側 反色層下層	土師器 壺A	22.0	2.4	密	良	SYR6/6 椿			
17	五 B地区北竪築 SD02北側 反色層底板	土師器 高壺		(3.2)	密	良	7.5YR7/4に似る橙			
18	五 B地区北竪築 SD02南側 反色層下層	土師器 壺	13.0	10.55	密	良	7.5YR6/4に似る橙			
19	五 B地区北竪築 SD02南側 反色層・S	土師器 壺	13.7	(14.8)	密	良	10YR7/3に似る黄橙			
20	B地区D2黒色土	土師器 壺	27.0	(6.3)	密	良	10YR7/4に似る黄橙			
21	B地区北竪築 SD02北側黒色土層	須恵器 壺A	13.5	1.9	密	良好	10YR7/1 反白			
22	B地区南竪築 SD02南側 反色層下層	須恵器 壺A	15.2	2.5	やや粗	やや不良	外2.5Y7/4 黄灰 内SY6/1 反色			
23	B地区北竪築 SD02南側 反色層下層	須恵器 壺B蓋	13.8	(1.8)	密	良	N6/ 反色			
24	B地区北竪築 SD02南側 反色層下層	須恵器 壺B蓋	19.2	(1.8)	やや粗	良	N7/ 反白			
25	五 A地区 西剥削	須恵器 壺B	16.0	5.0	密	良	N5/0 反			
26	B地区 SD02 灰色層下層	土師器 壺		(1.8)	17.0	密	良好	外SYR6/8 椿 内SYR7/6 椿		
27	五 B地区 SE02上層	須恵器 壺		(3.1)	8.6	密	良	N7/0 反白		
28	B地区北竪築 SD02南側 灰色下層	土師器 壺	5.7	(3.1)	密	良	10YR7/4に似る黄橙			
29	六 A地区 従植上升	土師器 土馬	1.6	4.0	庫 1.2	密	良	10YR8/4 反黄橙		
30	A地区 精青	土師器 土馬	2.1	3.8	庫 1.2	密	良	7.5YR8/6 浅黄橙		
31	B地区北竪築SD02北側 黑色土層	土師器 壺	17.0	(3.5)	密	良	2.5YR8/2 反白			
32	B地区SD02南側 黑色土層	土師器 壺	17.6	(6.2)	やや粗	良	7.5YR6/4に似る橙			
33	B地区北竪築SD02 北黑色土	土師器 壺	17.2	(7.6)	密	良好	10YR7/2に似る黄橙			
34	B地区 SE02 A 一段下げる	土師器 瓶A	12.6	3.2	密	良	SYR7/8 椿			
35	B地区北竪築 SD02北側 黑色土層	土師器 瓶	13.4	(3.6)	密	良好	外SYR6/8 椿 内SYR7/6 椿			
36	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶	13.8	(2.7)	密	良好	外2.5YR7/6 椿 内2.5YR8/4 浅黄橙			
37	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶	14.0	(2.9)	密	良好	外2.5YR7/6 椿 内2.5YR8/4 浅黄橙			
38	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶	14.8	(2.9)	密	良好	外2.5YR7/6 椿 内10YR8/4 浅黄橙			
39	B地区SD02南側 黑色土層内	土師器 瓶	14.6	3.6	7.3	やや粗	良好	外2.5YR7/4 浅黄橙 7.5YR5/2 反褐 内2.5YR7/4に似る橙		
40	B地区SD02南側 黑色土層	土師器 瓶A	14.6	(2.95)	密	良好	外2.5YR7/4に似る黄橙 内2.5YR7/3に似る橙			
41	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	15.6	(3.1)	密	良好	外2.5YR7/4 反白 内2.5YR8/4 浅黄橙			
42	B地区北竪築 SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	16.0	3.1	密	良好	外2.5YR7/3 浅黄橙 内2.5YR7/4に似る橙			
43	B地区北竪築 SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	13.6	(1.4)	密	良好	外2.5YR7/4に似る橙 内2.5YR8/4 浅黄橙			
44	六 B地区SD02	土師器 瓶A	14.0	1.5	密	良	7.5YR6/4に似る橙			
45	B地区北竪築 SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	14.0	(2.1)	密	良好	外2.5YR7/4に似る橙 内2.5YR8/4に似る橙			
46	B地区北竪築 SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	14.1	(2.0)	密	良好	外2.5YR7/4に似る橙 内2.5YR8/4に似る橙			
47	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶A	14.5	2.0	密	良好	外2.5YR7/3 浅黄橙 内2.5YR8/4 浅黄橙			
48	B地区SD02南側 黑色土層	土師器 瓶A	15.0	2.3	密	良	10YR8/3 浅黄橙			
49	B地区SD02北側 黑色土層	土師器 瓶B	19.4	3.3	密	良好	外2.5YR8/6 浅黄橙 内2.5YR8/4 浅黄橙			
50	六 B地区SD02 黑色層	土師器 壺	26.2	(16.3)	密	良好	7.5YR5/2 反褐			
51	七 B地区北竪築 SD02南側 黑色土層	黑色土器 壺	15.0	4.0	密	良好	外10YR8/3に似る黄橙 内2.5Y3/1 黑褐			
52	七 B地区北竪築 SD02南側 黑色土層	黑色土器 硝	11.6	3.5	4.6	密	良好	外2.5Y7/3に似る橙 内2.5Y3/1 黑褐		
53	七 B地区SD02南側 黑色土層	黑色土器 硝	12.0	(3.1)	密	良	外10YR7/4に似る黄橙 内N3/0 酒灰			

付表2 出土遺物観察表1

検査番号	図版番号	遺構	種類	器形	法量			胎土	焼成	色調
					口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)			
54		B地区 SD02南側 黒色土層	黒色土器	碗	13.4	3.6	5.8	密	良好	外:7.5YR7/6 植 内:7.5YR8/4-5/1 浅黄緑-褐灰
55	七	B地区 SD02南側 黒色土層	黒色土器	碗	15.0	3.7	5.6	密	良	外:7.5YR7/6 植 内:7.5YR8/1 黒
56		B地区 北括張 SD02南側 黒色土層	黒色土器	碗	15.8	(4.6)		密	良好	外:7.5YR6/4 にぶい緑~7.5YR2/1 黒 内:7.5YR7/1 黒
57		B地区 SD02南側 黒色土層	黒色土器	碗	19.0	(3.4)		密	良	10YR6/4 にぶい黄緑~8.5YR3/1 黒褐
58	七	B地区 北括張 SD02南側 黒色土層	黒色土器	皿	14.0	2.2	6.2	密	良好	7.5YR6/2 褐灰
59	七	A地区 焼塗	黒色土器	皿	15.0	2.5	6.0	密	良	外:10YR7/3 にぶい黄緑 内:7.5YR6/2 褐灰
60	七	B地区 SD02南側 黒色土層	黒色土器	豆	18.0	(11.65)		密	良	外:10YR5/2 褐灰 内:7.5YR6/2 褐灰
61	六	B地区 北括張 SD02北側 黒色土層	須恵器	环A	12.9	4.4		密	やや不良	5Y7/2 灰白
62		B地区 北括張 SD02南側 黒色土層	須恵器	环A	13.8	4.0		密	不良	5Y6/1 灰白
63		B地区 北括張 SD02南側 黒色土層	須恵器	皿	14.8	(1.7)		密	良好	外:10YR6/1 褐灰 内:7.5Y5/1 褐
64		B地区 反色唇削張 SD02 北側 黒色土層	須恵器	皿M	4.0	9.7	4.0	密	良	N7.0 灰白
65	六	A地区 焼塗 機械上げ・瓶下	須恵器	皿M	4.7	12.6	4.7	密	良	N6.0 灰
66		B地区 SD02南側 黒色土層	須恵器	豆	8.3	14.0		密	良好	N6/ 灰色
67	六	B地区 SD02南側 黒色土層	須恵器	豆	18.4	(7.1)		密	良	外:7.5YR6/0 灰 内:7.5YR6/3 にぶい緑
68	八	B地区 SD02北側 黒色土層	縦輪陶器	碗	11.2	(2.55)		密	良好	7.5YR6/0 褐 内:7.5Y3/2 褐オリーブ
69	八	B地区 SE02上層	縦輪陶器	碗		(1.5)	8.6	密	良好	7.5Y3/2 褐
70	八	B地区 SE02上層	縦輪陶器	碗	18.4	(2.7)		密	良好	7.5Y6/2 灰白 内:7.5Y7/3 浅黄
71	八	B地区 北断面0-10m(西端より)	縦輪陶器	皿	14.0	3.1	6.6	密	良好	7.5Y7/1 灰白 内:7.5Y7/2 褐白
72	八	B地区 北包括 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	皿	14.8	2.6	6.85	密	良	7.5Y7/2 緑色 内:10YR7/1 灰白
73	八	B地区 北断面西端より0-1m	縦輪陶器	皿		(2.1)	6.4	密	良	7.5Y7/4 浅黄 内:7.5Y5/1 灰白
74	八	B地区 SD02北側 黒色土層	縦輪陶器	皿	14.4	(1.9)		密	良好	7.5Y6/2 オリーブ灰 内:7.5Y7/6 明黄褐
75	八	B地区 SD02北側 黒色土層	縦輪陶器	碗		(1.6)	7.6	密	良	7.5Y7/2 灰白 内:10YR8/6 黄橙 内:7.5Y7/2 褐白
76	八	B地区 北包括 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	碗	19.0	8.2	8.0	密	良	7.5Y7/2 褐白 内:7.5Y7/2 褐白
77	八	B地区 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	碗		(3.1)	8.0	密	不良	5Y7/2
78		B地区 SD02南側 黒色土層下層	縦輪陶器	皿		(2.1)	7.2	密	良	7.5Y6/2 白 内:7.5Y7/1 明黄オリーブ灰
79	八	B地区 北包括 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	碗		(2.3)	7.0	密	良	7.5Y7/6 明黄褐 内:7.5Y8/3 黄
80	八	B地区 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	碗	19.8	(6.4)		密	良	7.5Y8/3 黄 内:7.5Y8/2 白
81	八	B地区 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	碗	20.3	(5.3)		密	良	7.5Y8/2 白 内:7.5Y7/2 白
82	八	B地区 SD02南側 黒色土層	縦輪陶器	唾壺	17.4	(5.25)		密	良好	7.5Y8/2 白 内:7.5Y7/1 白
83	八	B地区 北包括 SD02北側 黒色土層	灰輪陶器	皿		(1.8)	8.9	密	良	7.5Y8/1 白 内:7.5Y7/1 白
84	八	B地区 SE02 A一段下げ	灰輪陶器	碗		(3.1)	7.4	密	良	7.5Y8/1 白 内:7.5Y7/3 オリーブ黄 内:7.5Y7/1 白
85	八	B地区 北包括 SD02北側 黒色土層	灰輪陶器	碗		(2.0)	9.9	密	良	7.5Y8/3 オリーブ黄 内:7.5Y7/6 白
86	八	B地区 北包括 SD02北側 黒色土層	灰輪陶器	段皿		(2.1)		密	良	7.5Y8/1 白 内:7.5Y7/6 浅黄
87		B地区 SD02北側 黒色土層	土師器	皿	11.2	(1.45)		密	良好	外:7.5YR7/4 にぶい緑 内:7.5YR7/4 にぶい緑
88		B地区 北包括P127	土師器	皿	11.4	1.3		密	良好	10YR8/4 浅黄
89	六	B地区 北包括 SD02北側 黒色土層	土師器	坏	13.6	(2.3)		密	良好	7.5YR8/6 浅黄
90		B地区 北包括 P127	土師器	坏	14.8	2.0		密	良好	10YR8/3 浅黄
91		B地区 北包括 SD02 A一段下げ	土師器	羽蓋	21.0	3.7		密	良	外:7.5YR8/4 浅黄 内:7.5YR5/1 褐灰色
92		A地区 黒土機械削下げ	須恵器	鉢	18.8	3.3		密	良好	N8/ 灰白
93		B地区 SD02 南側 黒色土層	須恵器	長頸瓶	12.0	(3.0)		密	良好	外:N4/ 灰白 内:7.5Y5/1 灰

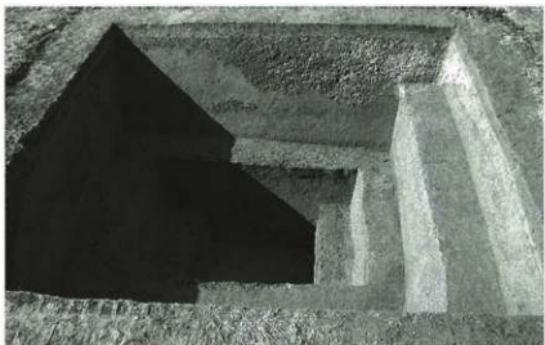
付表3 出土遺物観察表2

図 版

図版一 北東試掘坑北壁・南試掘坑西壁・調査区全景（北西から）



北東試掘坑北壁



南試掘坑西壁



調査区全景（北西から）

図版二
A地区全景（南から）・B地区全景（西から）・C地区全景（東から）



A地区全景（南から）



B地区全景（西から）



C地区全景（東から）

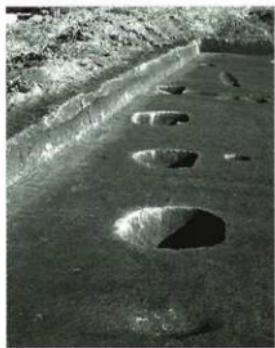
図版三 SB01 (北から)・SB05・06 (西から)・SB03・04 (南西から)・SB07 (南西から)



SB01 (北から)



SB05・06 (西から)



SB03・04 (南西から)



SB07 (南西から)

図版四

SD02 III期掘削全景

(北から)

・ SD02 III期遺物出土状況

・ SD02 I期掘削全景

(南から)



SD02 III期掘削全景（北から）



SD02 III期遺物出土状況



SD02 I期掘削全景（南から）

図版五 出土遺物一



11



13



25



27



8



18



6



14



19



20



17



61



50



67



44



65



80



29・30

圖版七 出土遺物三



59



60



55



53



58



52



51





72



71



80



79



81



68



74



70



82



77



78



73



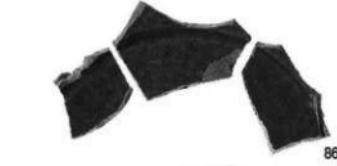
69



76



75



86



85



84



83

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査概要報告
卷次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	木村 友紀、板根 勝、小森 俊寛
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 Tel.075-961-5151
発行年月日	平成26年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		所在地	市町村					
遺跡範囲								
広瀬遺跡	島本町広瀬五丁目 616-1、617、618	27301		34° 88' 22"	135° 66' 90"	2012.11.19 ～ 2013.1.20	1006.3 m ²	宅地造成工事 に伴う緊急遺 跡範囲確認調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落	平安	掘立柱建物跡 溝状遺構	土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、瓦	平安時代前期の掘立柱建物跡を検出

島本町文化財調査報告書
第26集

発行 烏本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡烏本町桜井二丁目1番1号
TEL 075-961-5151

発行日 平成26年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都府京都市中京区新町通竹塀町下ル青葉天町300
TEL 075-256-0961

